



春燈

1月号

敦の句

初文楽親子の縁は一世とよ

句集『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

自註に「近松の『恋飛脚大和往来』新口村の場。梅川の台詞」とある。古里へ通れてきた封印切の忠兵衛にひと目逢つて進ぜてと、梅川が父親に頼む場面。「一世とよ」の措辞は哀切極まりなく惻々と胸をうつ。へ籐椅子にゐても立つても子を憂ふと詠んだ敦が、正月の演目に言寄せて現し世の親子の情を見事に詠みとめた秀句。夕暮の舞台に降りしきる雪の音が聞こえてくる。

中野あぐり

敦の句

まゆ玉にことしの塵のはやつもり

句集『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

長押しに挿してあるまゆ玉（小正月のお飾りとこだわることもあるまい）に塵が積つていると見立てた敦句。

自然界のリズムは、正月にも変化なく進行している。

几帳面な先生は、正月三日もすぎれば俳句の生活に戻りたい気分になる、この気分が心中にまゆ玉の塵を捉えた。「はやつもり」に今年の気分の強さが窺える。へ凭らざりし机の塵も六日かな〳〵塵の配役の妙味。

西谷良樹

主宰の句

西ヶ原日記（二）

鈴木榮子

一葉の新券使ふえびす講

一葉忌得恋をこそ加へたし

職人の銭湯道具柚子湯かな

教会に間借りの医院降誕祭
西箇原村無量寺除夜の鐘を撞く
つくつく鐘をつくつく除夜の鐘
除夜の鐘 主役の僧の袖襷
母あらばお飾奢れといふならむ
ペダル漕ぐ自転車が好き仕事始
万年筆てふ筆卒ら事務始

雪 晴

松橋利雄

親不孝健在大根引きにけり
蒟蒻掘る山に夕日を置きにけり
蕎麦食べに初雪を踏む途中下車
冬の滝ひとりはさびしすぎにけり
初薬師雨音しげくなりけり
捨つる句に未練などなし根深汁
口癖のどうにかなるさ室の花
朱線引く一措辞に咳こぼしけり
蕎麦打の後ろ鉢巻笹子鳴く
雪晴や受付嬢の片ゑくぼ

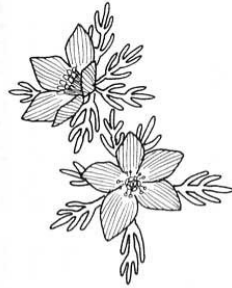
雁 渡 し

吉澤恵美子

流灯の灯は川をねむらせず
秋草を手折りし雲の迅さかな
佐助稲荷の鳥居の数や残る虫
杉の秀の雲掃く風や墓洗ふ
角曲り木犀の香によるめけり
松手入書斎明るくなりけり
夕萩の風呼びてより括らるる
裏窓を閉め忘れたる十三夜
破れ蓮おもひおもひの水の翳
行く秋やもの焚く煙むらさきに

当月集

鈴木 榮子選



○ 太田佳代子

息を吐くたびに眠りへつく良夜

秋深し砥石をすべる刃の音色

秋の夜や鏡の中にある真実

本抜けば本寄りかかる今朝の冬

白壁に日の残りゐる冬の坂

○ 小泉三枝

秋日濃しべんがら色の六賢台

塩地藏眼窩にも塩秋湿り

大仏の膝に遊行の残る虫

役終へし大石臼の夜長かな

石投げて沼へこませる良夜かな

○ 宮崎裕子

野分過ぐピカソの裸婦のよちれかな

ピカソ展秋思の柳の外れけり

墓穴に入るを思案の小半日

相性といふ外はなし交喙鳴く

職人の黙考長し松手入

○ 荻野嘉代子

月明の嵯峨にかすかや「想夫恋」

遺影なき別れでありし露葎

秋澄むや問答待てり維摩像

転害門佐保路へ急かす暮の秋

ブランド品質屋に売らる一葉忌

春燈の句

鈴木 榮子選



色鳥や襖の柄の見本帖

東京 菅沢 陽子

爽籟や如来の膝の菓壺

東京 藤田 信義

語り部の紀州訛や秋気澄む

神宝の太刀の御沙汰書文化の日

突出しに添へし紅葉や会席膳

涼しさや手さげ袋に鳩の寄り

アイガーに向かひて林檎かじりけり

なぎなたの子らの気合や秋高し

さびさびと雨の落葉松白秋忌

東京 岡野イネ子

石仏の台座に咲きし草の花

亡き人のセルは衣桁に干すばかり

白木櫃やさしき姿終りけり

浅黄幕落ちて鬼一の菊畑

色変へぬ松や井伊家の能舞台

東京 向井 芳子

吉原を抜けておさわの三の酉

こぼれ萩狂言塚の上にかな

遠望の白衣観音大刈田

東京 佐藤 玲子

百代経し城主菩提寺菊香る

冬近き三国峠を越えにけり

隠れキリシタンの十字の墓や秋の雨

旅にあり越後平野の穂つ穂

錦秋の空や金管楽器鳴る

東京 米沢しげる

女湯の目かくし満天星紅葉かな

実石榴の影遊ばせて阿弥陀堂

女生徒のをとこ言葉や色鳥来

東京 岩井 泉樹

朝寒や魚のはみ出す仕入籠

稲雀むかし巷にええぢやないか

撓みきて田に沈みけり稲架の脚

余言

鈴木 榮子

息を吐くたびに眠りへつく良夜

太田佳代子

感覚的な句だ。こういうことを考え、句にする三十代の人があることが嬉しい。「春燈」が格別な結社であった時代など全く知らないで若い方が少しずつ増えている。

睡りに入る瞬間は誰も知らない。知っているのは医療の機械であろう。波長で示されても実感はない。

旅でトリプル・ルームになる。ベッドの中で句を案じながら他の二人の会話が聞えてくる。起きてる気配はあるのにいつの間にか聞えなくなり、句帳も閉じそこで睡りに入るのだ。

作者は、三十代で新婚である。その心配はないだろう。外は良夜である。

秋澄むや有頂天より奈落まで

武田 巨子きよこ

作者は十六年度の春燈春星賞を受賞した。

二十句応募で題名は「京へ帰れば」である。題に示す通り京都生れで三重県へ嫁いだ。六人の選者から五点から一点までそれぞれ点を貰っている。

作者のいう有頂天はよく分るが、奈落が分らない。然し奈落も見た方がよい。俳句はどういう訳か、自分はいまいと思っている人がいる。そういう人に限って本当はそうではない。外のことで多少の自惚れはよいが、俳句だけは自分ですう思わない方がよい。だがただ恬淡と詠んでいても只事俳句になつてしまう。俳句は、心中身を削つて詠み上げた方がよい。作者の奈落に私も荷担しているかも知れない。

飛車角や哲学広場のベンチ秋

俵藤 正克

東京吟行会で中野の哲学堂へ行つた時の即吟。

私には哲学堂は一度位庭を巡つても哲学堂の何たるかを掴むに到らなかつた。だがこの光景は見た。宇宙の丘へ少し登り坂の手前の広場の隅で、ベンチに斜に掛けて将棋を差している人がいた。回りには暇そうな中高年の男性が縁台将棋のように五六人立って見ていた。十月の午後の日差しが公園にも人々にも眩しく差していた。宇宙の丘へ行く途中に見たその光景は、こう詠まれて見ると気がつき句を考えていただけに何か逃した魚のように残念である。

尾崎士郎の「人生劇場」の飛車角がよくとっさに出てきたものだ。

志村喬や辰巳柳太郎の青成瓢太郎、池部良、竹脇無我達の瓢吉、森繁の吉良常。キャストを替えて三回位観たように思う。

弁慶の往生遂げり枯鶏頭

長谷川歌子

弁慶で一番知られているのは安宅の関で義経を救ったことだろう。のち衣川で討死する。「弁慶の立往生」は衣川で身に何本もの矢を受けて、そのまま立ち堪えた立往生である。

いま作者の前の枯鶏頭は、まるでその弁慶のように丈高く枯れ廃れて葉も乱れ、紅い鶏頭の枯れざまはまことに「弁慶の立往生」を思わせたのだ。

見立て俳句という作り方があるが、この場合は品位を以てもとの本体を想起出来ることがよい。納得出来る成功例である。